

迫真タイムスリッ部！
過去改変の裏技！

ケツマン＝コレット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ああ～ゝ時空のズレ感じちゃう

迫真タイムスリッ部！過去改変の裏技！

目次

迫真タイムスリツ部！過去改变の裏技！

「f o o ! あつつく」

立教大学、空手部の部室。

脱衣所のドアがガラガラと开くと、全裸の三浦が体をタオルで拭きながら出てきた。
「あー、早くビール飲もうぜ」

「ビール！ビール！」

後に続く後輩の田所が、幼稚園児のように名詞を连呼して後に続く。「アツツく」「お、冷えてるか？」

三浦がビールの冷え具合を田所に聞くと「大丈夫つすよ、バツチエ冷えてますよ」と
阳気に返した。

二人の後ろで、一番の後輩である木村が、静かに続いて脱衣所を出た。

その後、特にビールを口にすることはなく、三人はふすまの部屋で座った。

「この辺にい、うまいラーメン屋の屋台、きてるらしいんつすよ」

上半身裸にズボンをはいた田所がそう言うと「あつ……そつかあ」とシャツにブリー
フの三浦は心のこもつてない返事をする。

「二人が適當な会話をしている間、木村は部屋の隅で一人、雑誌を読んでいた。

「じゃけん夜いきましょうね」

「お、そうだな」

二人が会話をひと段落させたところで「あ、そうだ。おい、木村あ」突然、三浦が木村の名前を呼んだ。

「あ、はい」

木村は雑誌から目線を上げる。

「お前、さつきオレらが着替えてるとき、チラチラ見てただろ」

身に覚えのない木村は、小首をかしげる。

「いや、見てないですよ」

「嘘つけ絶対に見てたぞ」

三浦が池沼特有の決めつけで言い張るが、

「なんで見る必要があるんですか」

木村から正論を叩きつけられ、固まってしまう。すると、

「あ、お前さ木村さ」

田所が話に割つて入ってきて、三浦の援護にまわった。「さつきヌツ、脱ぎ終わつた時にさ、中々風呂来なかつたよな?」

一瞬、鈴木福を思わせる顔で、田所がそう言うと「そうだよ」と三浦は、ヽヽゞとばかりに便乗し、追撃したが、

「いや、ですから見たというのであれば、その証拠を出してくださいよ。さつきから見た見たつて、口でいつてるだけじゃないですか」

至極もつともな反論で田所を黙らせると「そうだよ」と主体性のない三浦は、敵と味方の判別すら忘れて、木村に便乗した。

「フア！ ちよ、三浦さん。なんでそつちについてるんですか」

「だつて木村のいつてることが正しいからだゾ」

「話と違うじやないですか……。まあいいや。それより木村さあ、証拠証拠つていうけど、お前が見てなかつたつて証拠もどこにもないだろ」

苦し紛れに田所が屁理屈をぶつけると「そうだよ」お得意の便乗を三浦はかます。

無論、木村も黙つてはいない。

「何ですかそれは、悪魔の証明じやないですか。見てない証拠がないからといって、見てたことにはならないでしよう」

「そうだよ」

「証拠ならありますよあるある。オレと三浦さんが見てたつて、ハツキリ証言してんだね」

「そうだよ」

「それは第三者の意見じゃなくて、当事者である二人の意見でしよう！ 勘違いかもしないし、ボクを陥れる目的があるかもしれない。証拠能力は限りなく低いですよ！」

「そうだよ」

「いいや、絶対見てたね」

見てた見てないの水掛け論と便乗を一時間ほど続けたとき、ついに木村がぶち切れた。

「ああ、分かりましたよ。なら、ちゃんとその目で見せてあげますよ。ボクがチラチラ見てなかつたつてことを」

「なんだあ木村あ。タイムマシンでも作るのか」

「ええ、そうです。作つてやりますよ」

木村がそういうきると、田所は腹を抱えて笑い出した。

「ハハハハ！ できるわけないだろ、バカじやねえの」

「勝手にほざいててくださいよ。その代り、ボクが見てなかつたのを証明できたら、先輩、土下座して謝つてくださいよ」

「あ、いいっすよ。土下座でもなんでもしてやるよ。何なら、ホモビ出演して脱糞してる所を世界中の人に見せてやるよ」

「その言葉、忘れないでくださいよ」

木村は持つていた雑誌を床にたたきつけると、バツクを背負つて立つた。「じやあボク、タイムマシン作るために帰りますから」

「マジでいつてるのかあ、木村あ。まあいいや、三ヶ月待つてやるよ」

「一月で十分です！　泣いて謝つても遅いですからね！　ちゃんと、部室は鍵しめて帰つてくださいよ。じやあ！」

そう吐き捨てて部室を出て行く木村を見送ると、田所は口角を吊り上げて、三浦と顔を見合せた。

「やりましたね、三浦さん。ちょっと予定は狂いましたけど、これを口実にあいつを3Pレイプしちゃいましょう」

「お、そうだな」

「一月後が楽しみっすね。じやけんラーメン屋、行きましょうね」

「いいゾ、それ」

二人はにたにたと笑いながら、荷物をもつて外に出た。

ドアが閉じられ、鍵の閉まる音と共に、しんと静まり返る部室。

誰もくる気配がなくなつたところで、勢いよく押入れのふすまが開くと、木村が出てきた。

「ホラ、どうですか！ チラチラ見てなかつたでしょ！」

「いや～、どうだつたかなあ。チラチラ見てたようにも見えたんだけどなあ～」

続いて田所も出てくると、後ろの三浦の方を向く。「三浦さんはどう思いますか

「中が真っ暗だつたから、よく見えなかつたゾ」

「はあ？」

二人の曖昧な発言に「なにを言い訳してんですか！ どう見ても見てませんでしたよ」と木村が声を荒げる。田所はなだめるように両手を前に出す。

「まあまあ、落ち着けよ木村あ。実際に、オレ達の方を何回か見てただろ」

「部室にはボクら以外いないんですから、そりや多少は見るでしようよ」

「それはチラチラ見てたつてことだろ？」

「いや、そのチラチラつていうのは、ボクが性的な目で二人を見てたつて事でしよう？

先日の先輩の言い方は、そんな感じでしたよ」

「そうだつたかなあ？」

すっとぼける田所を、木村は睨みつけた。

「そうやつて言い逃れする気ですか」

「言い逃れっていうか、あれでしょ、受け取り方の違いつてやつでしょ。まあ、この話はなかつたつてことにしよう。木村も疑いが晴れたんだからさ、それでいいだろ」

これ以上いつても、また水掛け論になるだけだと、木村は不機嫌そうに舌打ちをして、しぶしぶ黙った。

「それにしても、木村はすごいゾ」

三浦はそう言いながら、手首にまかれた機械を触った。「本当にタイムマシンを作っちゃうなんて。しかも一週間で」

「死ぬ気で勉強しましたからね。まあ、まさかボクも一週間で、こんなものを作れたことは驚きでしたよ。それより、確かめるのも終わつたんで、さつさと元の時間軸へと帰りましょう。下手に長居すると、見つかるかもしれません。そうなると面倒です」

三人は手首にまかれた機械を、木村のいう通りに操作すると、一瞬のうちに姿を消した。

終業時間となり、木村が空手部の部室へと向かる廊下の途中、

「おーい。木村あー」

後ろから声がして振り向くと、田所が足早に隣に並んだ。「空手部だろ、一緒に行こうぜ」

「はい」

本当は、田所なんかと一緒に歩きたくはないが、断る理由がないのでそう答えた。

「あ、そう言えばさ、お前さ木村さ、タイムマシンつてどうなつたの」

「部屋に置いてありますよ」

タイムスリップで、過去の部室を調べてたのは、一週間前の話だ。

特に身の回りにこれといった変化はなく、タイムパラドックスのような事故は起きなかつた。

「そのマシンさ、明日ちょっと持つてきてくれないか」

田所のその提案に、嫌な予感を察知した木村は、疑りの目を向けた。

「……何に使う気ですか」

「そんな目すんなよ。ていうか、過去に戻りたいのは三浦さんの方だから」

「三浦先輩が？」

三浦は池沼だ。マシンを使って悪だくみをするような人——というよりも、考へれる
ような人じやない。

「三浦さん、部室にいるみたいだからさ。詳しく述べて話そう」

三浦さんの叔父、博之は有名な迫真空手家だつたらしい。

その昔、日本が中国と戦争中だつたころ、侵攻して統治した中国領で、博之は上官と

して兵士たちに空手を教えていたそうだ。

あるとき、博之はその領内で見つけた、中国武術家と試合をしたらしい。その際に――

「頭を強く打つて、バカになつてしまつた……と」

木村がそう聞くと、畳の部屋で胡坐をかいた三浦は「そうだよ」とうなづいた。「あの時から、ジツチャマ（叔父さんのこと）は一人でトイレも行けなくなつたらしいゾ」「なるほど。それで、タイムマシンを使って、叔父さんを救いたいと」

「そうだゾ。ジツチャマが死んじやう数日前に、見舞いに行つたけど、もう何を話してるのがすらわからなかつた。めちゃくちやかわいそだつたゾ～コレ。だから頼むゾ」
うーんと、木村は唸りながら首をかしげた。

過去の改変。それは安易に行つてはいけないことだ。下手にいじくりまわせば、自分たちの存在すら危うくなつてしまふ。それと――

「カアイソウニ……カアイソウニ……」

田所がそう呟きながら、三浦の肩に手を置いた。「おい木村あ。こんな先輩を見捨てるつていうのかあ？」

問題はこの人だ。

一見、三浦に同情し悲しんでいるように見えるが、木村の目には何かを企んでいる

ようにならなかつた。

とはいへ、確かに三浦の叔父さんはかわいそうだし、その時代の、その場所にタイムスリップしたとしても、田所に直接、結びつくような縁がなければ、田所も自分の利益になるような悪だくみはできないだろう。

木村は、数秒の思案の末「分かりました」と顔を上げた。「その代り、ちゃんとボクのいうことを聞くこと。決して大きく過去が変わることはないことは慎むこと。この二つを絶対に守つてください」

「当たり前だよなあ?」

「守りますよ~守る守る」

なんとも引っかかる二人の適当な返答を聞き、本当に大丈夫かな、と木村は心配しながらも、翌日、木村はマシンをもつて部室にやつてきた。

「すでに機械には、三浦先輩の叔父さんがいる、中国の沼池という町に飛ぶように設定してあります」

「じゃけんすぐ行きましょうね~」

そう言つて、すぐに手首にそれを取り付けた田所に、

「ちよと待つてください!」

と木村は制止し、田所の周りをグルグルと周り、観察する。「変なものは持ってきてな

いでしようね」

「疑り深すぎる……疑り深過ぎない？」

「田所先輩のことですから、信用できませんよ」

木村は田所が特に何も持つていなさそうなのを確認すると「現代の物は、なんだつて持ち込み禁止ですよ」と顔を上げた。

「分かつてるつて」

そう返す田所の顔は、どうも何を隠している気配がした。

本当に大丈夫だろうか。どうも悪い予感がする。

「ポツチヤマは持つて行つていいか？」

突然、三浦がポツチヤマのぬいぐるみを見せたが、即座に「ダメに決まつてるでしょ」と木村に一蹴された。

「ポツチヤマ……」

「人形だろうが何だろうが、持つていくのは禁止です。本当なら、服だつて脱いでいった方がいいんですねからね」

「分かつたゾ」

「よし。じゃあ機械のスイッチを押してください」

木村の号令と同時に、三人がスイッチを押すと、周辺の景色が一気に変化した。

色あせている石造りの建物が立ち並び、薄汚れた布服を着た中国人らしき人たちが、右へ左へと歩いている。

「おー、ここかあ」

田所が物珍しそうに、周りを見渡すと「先輩先輩」と木村が肩を叩く。「あまり住民を刺激しないでください。ここは日本軍が侵攻した場所です。彼らは日本人を憎んでいます。下手したら、襲われるかもしれませんよ」

「大丈夫でしょ。まあ、多少のいざこざはね?」

「多少で済んだらラッキーですよ。殺される可能性だつてなくはないんですから。ともかく、目的は三浦先輩の叔父さんを助けることです。さつさと用事を済ませて帰りましょう」

「記録によれば、ここが日本軍の司令部です」

三人は周りの建物と比べ、ひときわ横に大きく、高い塀に囲まれた豪華な建物を見上げる。

「司令部つてよりも、金持ちの家っぽいな」

「ぼそりと、田所が言うと、

「まあ、日本軍が占拠した一般人の家でしようから」

平然と木村がそう返した。

「ええ……ちょっとひどい……ひどくない？」

「戦争なんてそんなもんですよ。人口密集地に核を撃つたり、民間人に竹ヤリ持たせてまで戦いを続けようとしたり。例を上げればきりがありません。まあ、いまそんなこと言つたところで、どうにもなりませんからね。僕らができることは、ここより未来に生れたことを感謝することぐらいですよ」

「お、そうだな」

三浦は便乗すると「よーし。じゃあジッチャマに会いに行くゾ」

「あ、ちょっと待——」

「何だ貴様ら！」

すげすげと、まるで自分の家に入るかのように門に向かう三浦を、木村は止めようとしたが、その前に門の前に立つ日本兵に阻まれた。

木村は頭を抱えた。

やつてしまつた。これじや、不審者だと思われてしまう。

この町では統治者である日本軍が法。流れによつては、三人とも牢屋へと留置。最悪の場合は死刑だ。

「ジッチャマに会いに来たゾ」

「ジ……何をいつている貴様！ 知恵遅れなのか！」

何一つ物事を理解していない三浦は、日本兵と口論している。

「ちょ！ ちょっと待ってください！」

焦つた木村は、二人の間に割つて入る。「あの、あのですね。実は彼は、ここにいる、あなたの上司である三浦さんのご子息として——」

説明の途中「何だと！」と日本兵は怒りをあらわにした。「私たちをバカにしているのか！ あの三浦閣下の息子が、こんな知恵遅れのような顔をしているわけがないだろう！」

「いえ、彼は日本からここまで来るまでの間の、長旅で疲れていまして」

そつと木村は、三浦の耳元に口を近づけると「三浦さん、左の方にTNPのデカそうなイケメンがいます」とつぶやいた。

「え？」

一瞬にして、キリッと引き上がる三浦の顔。それを見るや、

「おお！ その凜々しいお顔はまさしく三浦閣下のもの！」

確信した様子で、日本兵は言つた。「疑つてしまて申し訳ない。すぐに閣下の元へと案内させていただく」

「いえ、わかつていただけたのならよかつたです」

「では、こちらへどうぞ」

日本兵を先頭に門の中に入つていくと、

「おい、木村あ。イケメンつてどこに居たんだ」

「そうだよ」

キメ顔をしながら、周りをきよろきよろと見る、後ろの頭の悪い二人がそう聞いてきたが、「さあ」と適当に木村は返した。

「閣下、ご子息が参られました」

最奥の部屋に、日本兵がノックしてそう言うと、

「入れ」

と低く重みのある声が、扉越しから聞こえてきた。

日本兵が扉を開けると、三人は中に入る。

そこにはいくつかの書類が置かれた、高級感のある机の向こうで、日本兵の言つた通り、凛々しい顔をした三浦の叔父、博之らしき人物が、空手着姿で座つていた。

確かにその顔には、どことなく三浦の面影を感じられる。

「どういうことだ」

博之は三人をゆつくりと往復して見ると、敵意を含んだ声でそう言つた。「私の息子」というが、どこにもいないじやないか。中国の回し者か」

「違うゾ。オレはジツチャマの孫だゾ」

「三浦先輩、ちょっと黙つててください。話は僕がします」

池沼の三浦に変わり、木村が事の顛末を説明する。

「未来から来た……か。信じられん話だが……」

博之は三浦の顔をじっと見る。「その顔は、確かに我々の家系のもの。息子とうり二つだ。だが、私に似た中国人を探してきたとも考えられる」

「三浦先輩」

その様子を見て、木村は聞いた。「なにか孫である、三浦さんでしか知り得ないような情報はないんですか」

「尻アナなら、ちゃんとあるゾ」

「尻アナじゃなくて、知り得ないこと。例えば、叔父さんが誰にも言つてない秘密とか」

「ああ、それなら一つあるゾ。ジツチャマは女ものの下着をつけながら、うんこを漏らすのが好きだつたゾ」

「うわ、きつつ。」

木村はかなり引きながら、博之の顔を見てみると、いまにも殴り掛かりそうなほどに、手を顔の前に組みながら、こちらを睨みつける目があつた。

ヤバイ。三浦先輩が適当なことをいうから、怒らせたのかもしれない。

そもそも、女装しながら脱糞して性的興奮を覚えるなんて、トチ狂った性癖を持つて
るなんて思えない。

そう思つていると、

「信じよう」

「……え」

博之からの返答に、木村は耳を疑つた。

「信じようと言つたのだ……キミらは未来から来たもので、そいつは私の孫だ」

考えたくはなかつたが、どうやら三浦のいつていることは本当のようだ。

すると、どうしてだろうか、来たときからあつた博之の威厳や、威圧感といったものが一気に薄まつた気がした。

「わ、わかつていただけたのなら良かつたです」

木村は衝撃の事実に、たどたどしくもそう言つた。「なら、近々ある中国人拳法家との試合を、辞退していただけますか」

「……それは、難しい問題だ」

博之は立ち上がると、腕を後ろに組み、なにかを考えるようにこちらに背を向けた。
「明日の試合は、私から申し込んだものだ。すでに、我が軍だけではなく、町全体がそれを知つてゐる。もし、この試合を取り辞めるとなれば、当然、私が怖気づいたものだと

言われるだろう。それは私自身のみならず、日本軍……いや、日本全体の恥だ

「そうですか」

「ポツチャマ……」

が、
博之の反応を見て、意思が固いことを察した木村と三浦は、残念そうに肩を落とした

「だが……それと引き換えにしても、やらねばならぬことがある」

博之は振り返り、決意を持った目で一人を見た。「これが我々、三浦一族の子孫だとうのであるというのなら、ほおってはおけん」

博之は険しい表情で三浦のことを見たが、三浦は池沼なので、なにもわからず首をかしげた。

「どういうことだゾ?」

「説明は、ちゃんと僕が後でしますから」

木村は三浦にそう言つて「では博之さん、よろしくお願ひします」と頭を下げた。

「分かつていただけて良かつたですね」

「お、そうだな」

二人は司令部を出て、少し歩いたところで止まつた。

「それじやあ、やることもやつたので、現代に戻りに——」

その瞬間、木村は気づいた。「あ、あれ、田所先輩は」
周りを見渡すが、田所の姿がない。

「そういえば、いつの間にかどつかにいつていたゾ」

「司令部の中ではぐれたんでしようか」

木村はそう言いながらも、不穏な予感を察知していた。
あの人のことだから、きつとろくなことはしない。だが、なんの身寄りもないこの地
で何ができるのだろう。

「おーい。木村あ、三浦さーん」

考えていると、不意に田所が手を振つてやつてきた。

「先輩、どこいってたんですか」

第一声に木村がきいたが、

「いやあ、ちよつと迷っちゃつてさあ」

田所は目線をそらしながらそう答えた。

怪しい。なにかを隠している。そう確信したとき、
「田所も、ジツチャマに会いにいつてたのか?」

三浦が意味深なことを聞いた。

「え?」

木村はその言葉を聞き逃さず、三浦に聞く。「ジッチャマつて……もしかして、田所先輩の叔父さんも日本軍にいたんですか! どうしてそんなことを隠していたんですか!」

「ちょ、三浦さん。黙つててくださいって言つたじやないですか」

田所が焦りながらそう言うと「あつそつかあ」三浦は呆けながらそう答えた。
「先輩、いつたいなにをしたんですか!」

木村は声を荒げ、田所に迫る。「今すぐ答えてください! ことによつては、過去に戻つて先輩が生まれないように過去を改変しますよ!」

「そんなあせんなつて木村あゝ。ちよつと昔の新聞を渡しあだけだつて。宝くじが当たるようになさ」

「宝くじつて」

木村は口に手を添えて考えた。

宝くじが発売されたのは、確か戦時中、昭和20年あたり。

最初に発売された宝くじの一等は10万円。10円で食事を賄えた時代だ。相当な額になるだろう。

この時代の物だから、十分な大金だ。だが、田所がその程度の金額を狙うとは思えな

い。

戦後、日本は爆発的なインフレが起こり、紙幣価値が一気に下がる。

そして、その後の好景気によつて、一等が400万、500万円ほどになつた時の新聞を渡しているだろう。つまり、渡した新聞は大体、この時代から20年後程度の新聞。だとすれば——。

「まずいですよ!」

木村は思わず声を上げた。「そんなことしたら、一気に未来が崩れます!」

「数百万ぐらい、たいしたことないでしょ。心配し過ぎだつて。それとも、金持ちになるオレがうらやましいのかあゝ木村あ。だつたらお前もやつたらいいじゃん」

まるで事の重大性を理解していない田所に「そのステロイドにあふれた脳みそで、少しは考えてみてください!」と木村は怒りをあらわにした。「いいですか。これから先、日本は戦争に負け、強烈なインフレとなる代わりに、隣国で起きる朝鮮戦争によつて大量の物資が売れることになり、一気に好景気になります。その後、すぐに高度経済成長期に突入するんです。いろんなものの価値が一気に上がり、逆に下がりもします。未来の新聞を手にしたら、それらの大体を把握できることになるんですよ! これによつて発生する富は、はかり知れません。田所の叔父さんは、一気に大富豪になつちやいます。過去の大幅な改変ですよ!」

「つまり未来に帰つたら、オレは大富豪ってことか。三浦さん、今度ラーメン行くときは、オレがおでりますよ」

「よろしく頼む」

「なにをのんきにしてるんですか!」

普通に会話をしている二人に、木村は叫ぶ。「このままじゃ、本来行くべき場所に行くお金が、田所先輩のところに行つてしまします。それによつて、人が死ぬかもしませんよ」

「ちよつと考えすぎだつて木村あ。オレの叔父さんが金持ちになつたぐらいで人が死」
瞬間、目の前から消え去る田所。

「……え?」

あまりにも唐突なことに、木村は数秒間、放心した後、そう口に出した。「田所先輩?」
名前を呼び、周囲を探るもその姿はない。

後ろを振り向くも、三浦も訳が分からぬといつた様子で、首を横に振る。

それもそのはずだ。木村の目の前にいた田所は、移動したという感じは全くなかつた。ダトすれば……。

「三浦さん……あの、一つ聞きたいんですが。田所先輩の叔父さんつて、ホモですか」
「田所の叔父がホモかは知らないけど、父親はホモだ。前、家に行つたときに掘られかけ

た」

「やつぱりかあ」

木村は困ったように頭を抱え、その場にしゃがみ込んだ。

「やつぱりって、どういうことだ。何があつたんだ木村」

「形式だけの結婚だつたんですよ。先輩が変える前の過去は、先輩のお父さんも叔父さんも、女性と結婚して子供を産んでいます。だから、田所先輩がこの世に生まれました。だが、お父さんか、もしくはどちらも、その結婚は世間体や周りの目を気にしたことによる、女性の同性愛者か、無性愛者との形式結婚だつたんです。僕らの世代では、パートナーシップだとか、L G B Tだとか、そういう人間たち、つまり先輩のような人たちに対する理解が深まっていますが、昔はそうじやない。変な目で見られるならまだしも、攻撃の対象になつたりします。でも、世界を動かせるほどの富豪ならそうじやない。世間体や周りの目なんて気にしなくていいし、金があるから男だつてあさり放題です」「そこで田所の血が途絶えたということか」

「いえ、もしかしたら途絶えてはいないかもしません。ですが、金のある場合とない場合とで、出会う人間や、選ぶ人間だつて変わつてきます。なにはともあれ、田所先輩は生まれては来ませんでした。先輩が消えたのが、その証拠です」

「なるほど。なににせよ、田所は自らの業に焼かれたのだな」

「そうですね、まあ簡単にいうなら自業じと——」

自らの業?

謎の言い回し。ましてや、IQのとんでもなく低い三浦からは出ないような、変な言葉。

不思議に思つた木村は振り向くと、見えたのはいつもの池沼顔の三浦ではなく、博之を思わせるような凜々し顔勃ちだつた。

「先輩……あの、なんですかその顔」

「顔?」

三浦は自らの顔を触る。「……別に、なんともないが。だが、なんだかすがすがしい気分だ。頭の中がすつきりしている。まるで別人になつたみたいだ」

いや、そのまんま別人だ。どう見ても、今までの三浦先輩ではない。

博之を助けたことにより、博之から三浦の父へと、そして父から三浦本人へと施されていた池沼教育が、まともな迫真空手教育となつてしまい、一気に人が変わつてしまつたのだ。

「ああああ！　ど、どうしよう。また未来を変えてしまつた！」

「焦るな木村よ。この世は流れるままになる。過去を思つても何も変わらない。先のことを考えていくう」

「深いようでよくわからないこと言わないでくださいよ……。しかし、どうしましようか。とりあえず未来に帰りますか」

「いや、オレここに残る」

「へえ!？」

思わぬ言葉に、木村はぎょつとして三浦の方を向く。「なんで急にそんなこと言いだすんですか」

「オレ達のいた時代では、武道は衰退の一途をたどっている。本来の武術を極めることは難しい。だが、ここには叔父様がいる。の方となれば、オレはもつと高みに行ける気がする」

「やめてくれよ」

震えた声で木村は止める。「そんなことしたら、未来の先輩は消えることになるし、なにより過去がさらに変わってしまいます」

「これはオレの人生だ。止めてくれるな」

木村を背にし、三浦は走り出した。

「待つてください！　三浦さん、お願ひします。少し話を……」

鋼の意思を持つた新三浦は、振り向くことなく木村の視界から消えた。

「ああ、どうしよう」

木村はその場で地面に手をついた。「どうにかして三浦さんを戻して、未来に帰らないと。僕にできるか……いや、やるしかない。それと……田所先輩は……うーん三浦がここに残ることになつてしまふと、それは未来の三浦が行方不明になるということ。

だが、田所はそもそも未来の存在自体が消えてしまつたので、このまま帰つても別に困ることはない。

田所は人間の屑な部分を煮詰めた、超ゴミクソ人間だ。助ける必要はないのだが……。

木村はぐつと眉間にしわを寄せた。

脳裏によぎるのは、あの日、タイムマシンを作るといつて帰つた、その晩のこと。

……仕方ない、助けるか。

「フン！ フン！」

「失礼します」
夜も更けたころ。司令部の一室。広い武道所で、博之は一人、空手の型を行つていた。

声とともに重厚な扉が開くと、木村が入つてきた。
「君は、確か孫の友人の」

「どうも、木村です。三浦さんはどうなりましたか」

「ああ、私と共に武道を歩むと言つてくれたよ。不思議な感覚だが、悪い気はしない。あいつと共に、私は迫真空手を極めようと思う」

「そうですか。それより、向こうにあるフリルのついたピンク色の下着は何ですか」

「なに!?

博之が驚愕しながらも振り向き、目を見開いて下着を探した。「なつ、ど、どこに下着が——」

「えい！」

「うつ」

その隙をつき、木村は鉄の棒を博之の後頭部に思い切り振り下ろした。

「おつ……い、いつたい……何を」

意識が朦朧としながらも、木村に問うたが「おりや!」棒は再度振り下ろされ、博之は頭から床に落ち、気を失た。

「もう一発ぐらい、いつとこうか」

完全に動けない博之の後頭部に、もう一度、棒を振り下ろした後、

「良し……せんぱーい！ 三浦せんぱーい！」

三浦を呼ぶと、

「お、どうした」

木村が入ってきた扉とは違う場所から、眠っていたのか目をこすりながら三浦が出てきた。

「あ、先輩。叔父さんと一緒にいるといつていきましたが、やつぱり帰りませんか」

「そんなこと急に言われても……ど一つすつかなあ」

「ほら、好物のお母さんのおにぎりが食べれなくなつちやいますよ」

「あつそつかあ。じやあやつぱり帰ろうかな」

そばまで歩いてくる三浦。その様子を、木村はじつと観察した。

「三浦先輩、19たす19つて分かりますか?」

「なにいってるんだ。38だろ」

「えい！　えい！」

三浦が答えた瞬間、木村は博之の後頭部に二発、拳を打ち込んだ。

「木村あ、なにをしているんだゾ？　というか、その倒てるのはだれだゾ？」

「ああ、これは人形ですよ。それより先輩、8たす10つて分かりますか」

「364だろ。バカにすんなよ木村あ～」

「よし、戻つてますね」

「なにが戻つてるんだゾ？」

「いえ、こっちの話です。後は、コレをここに置けば、すべて解決です」

「お、オレじやありませんよお」

「黙れ！ 三浦閣下の襲われた場所に、貴様のパンツが置いてあつたんだ！ 早くこち
らへ来い！」

街中で日本兵に連行されていく、田所とうり二つの軍人。

木村と三浦の二人は、それを遠くの物陰から見ていた。

「よし、うまくいきました」

木村が胸の前でぐつと拳を握ると、

「あれ、ここは」

二人の後ろに突然、田所が現れた。

田所は寝不足のように、ぼおつとしながら、木村と三浦の顔を往復する。

「なんだ……なんか、ながい間、眠つていたみたいだ」

「おお、田所が生き返ったゾ」

「生き返った？」

三浦の言葉に困惑する田所に、木村が説明する。

「ええ、先輩が叔父さんを大富豪にしちやつたから、先輩の存在が消えてしまつたんです

よ。ですけど、叔父さんを逮捕させることによつて、それを未然に防ぎました

「なるほど」

田所はずいぶんと疲れた様子で、肩を落とした。「すまん、木村あ。危うく死ぬところだつた」

「いいですよ。でも、これで懲りたでしよう」

「そうだな。じやあ、さつさと未来に帰りましょうか、三浦さん」「お、そうだな」

木村が装置を操作し、ボタンを押すと、三人はいつもの部室に帰ってきた。

「ああ、やっぱりここは安心感があるなあ」

田所は両手を上げて、背筋を伸ばした。「長い間、旅行にでもいった気分だ。なんかどつと疲れたぜ」

「先輩は新聞渡して、少しの間、消えてただけじゃないですか」

不満そうな表情で、木村はそう返す。「一番、大変だつたのは僕ですよ、もう」

「いや、そうだけどさ……なんでかな……す、すごいしんどい」

「確かに、田所ちょっと痩せたゾ」

「痩せた?」

三浦の言葉を不思議に思い、木村はつぶやいて田所の体を見る。

すると、確かに体がやせ細っていた。田所の唯一といつていい長所の部分、筋肉が見
る影もない。

「おかしいですね。存在が消えたとしても、筋肉が減るなんて……あ、分かりました」
「何がわかつたんだあ、木村あ」

やつれ、頬に影を作った田所は聞いた。

「先輩の叔父さん、捕まっちゃいましたから、軍人を解雇になつたんですよ。一気に収入
減がなくなつて、貧乏になつた、というわけです。それに引きずられる形で、先輩の家
も貧乏になつてしまつたんでしょう」

「どういわけです、じゃねえよ。これどうすんだよ木村あ」

「さあ、知りませんよ。自業自得でしょ。なんだつたら、もう一回、存在を消してあげま
しょうか」

「く……こ、この悪魔め」

「歴史を自分勝手に改変しようとした人に、言われたくありません。じゃあ、僕はもう帰
りますね」

「お、そうだな。オレも帰るゾ
「ちよ、ちよつとまつて」

部室を出る二人を追おうとしたが、すぐに力が抜けてその場で倒れ込んだ。「ハア、

「ハア、ち、力が出ない」

息を切らしていると、携帯が鳴った。

「おいゴラあ！　お前いいかげん顔みせろ！」

借金の催促の電話だった。それも、何件も。

「いつ払うんだよお前よお。学校にいうぞお前。

——今月中に5万も払えないの？　そんなんじや甘いよ。

——（一月で）36（%の利子）……普通だろ？

「く、くそう」

まだ電話は鳴り続いているが、もう田所には出る気力もなくなっていた。

このままじや、借金地獄でまともな人生も歩めない。

こうなつたら……。

ガン掘リア宮殿の一室。黒ソファーに座る、見るからに栄養失調氣味の田所に、バツドマンはインタビュー始めた。

「じゃあ、まず年齢を教えてくれるかな」

「24歳です」

「24歳？　もう働いてるの？」

「学生です」

「学生、あつ……ふーん。え、身長体重はどれぐらいあるの」

「身長が167cmで」

「うん」

「体重が19キロです」

「19キロ……今なんか、食べてるの？ すごい、ゲツソリしてるけど」

「特には食べてないんですけど、水はいっぱい、飲んでます」

「風俗とかは行くの」

「行けるわけないでしょ」（半ギレ）

「あ、そうか、そうだよね、行くぐらいなら」

「ご飯を買いますよね、ハアイ」

「じゃあ、オナニーツてのは」

「やりますねえ！」

「……やるんだ」

「やりますやります」

「週、どのぐらい」

「シュー……三日か四日ぐらい」

「はあああ、どどど、どうしよう」

木村は自室に入るや、ベッドに腰掛けて頭を抱えた。
一月以内にタイムマシンを作ると、啖呵を切つて帰つてきたが、そんな物、作れるはずがない。

しつこいステロイドハゲのせいで、らしくもなく感情的になつてしまつた。

「このままじゃ、適當なこと言われて、絶対に3Pレイプされてしまう！」 いつたい、どうすればいいんだ

「ちょっとといいかな」

不意に聞こえてきた声。顔をそちらに向けると、部屋の真ん中に40代の男が立つていた。

「え！ だ、誰ですかあなたは！」

「落ち着いて」

謎の男は両手を前に出し、木村をなだめるようにそう言つた。「僕は未来の君だよ」「未来の僕？」

言われてみれば、どことなく自分に似ている気がする。

「そうさ。キミは感情的になり、できもしない約束をしてしまつたんだろう。そのせい

で、僕は3Pレイプされ、心に深い傷を負つてしまつたんだ。それが今でも残つていね、何とか過去を変えようと、執念でタイムマシンを完成させたんだ」

「すごいですね、世紀の発明じやないですか。人類の英雄ですよ」

「そのとおりだね。だけど、これを公表する気はないよ。僕は、自分のレイプされた過去を変えたいだけだから」

「なんか、すごくもつたいないことしてると気がするんですけど」

「そうだね。でも、悪用された場合、取り返しのつかないことになりかねないから」

「まあ、そうですね」

「じゃあ、キミにマシンを三つと、その取扱いを教えるよ……それと、その前に先に一つ聞いておきたいんだけど、もし田所先輩の身に命の危険があつたら、どうする?」

「え? 無視しますよ。死んだっていいし」

当たり前のようすに、木村は答えた。

「うーん、過去の僕ながら、なかなか思いやりのない答えた。まあ、あの人がそう思われても仕方ないクソ人間だつてことは、わかつてはいるんだけどさ……あの人はあの人为、凄まじいことが起きるから、まあ命ぐらいは助けてあげてよ」

「未来の僕の頼みといえど、それは難しいお願ひですね。その凄まじいことつて、なんなんですか」

「あの人が出でたホモビデオが、ネットの一大ブームになつて、日本でかなりの人数が知ることになるんだ。そのせいで、喘ぎ声で曲を作られたり、イキ顔を晒されたりして、一生ネットのおもちゃになるんだ」

うん……まあ、命ぐらいは助けてあげよう。

木村は心の底からそう思った。